書評　申小龍著『中国語言的結構与人文精神』
（光明日報出版社、文字与文化叢書、九二〇円）
『中国句型文化』（東北師範大学出版社、八八〇円）

中国言語学のニューウェーブ——ドラゴン現象

内田慶市

中国言語学界で今、新しい風が巻き起こっている。それは、「XY派」（機関誌『現代語言学』の頭文字に由来し、併せて破壊の主張するところの「exze（描写）」から「xzx（解釈）」へ」の「X」「Y」をも意味する）と呼ばれる「上海青年言語学グループ」であり、その中心メンバーの一人が復旦大学中国語言文学研究所理論語言学研究室の申小龍氏である。これまでに『現代語言学』や『上海青年語言学』『復旦学報』『中国語文』等の雑誌に数多くその多さは驚異的であり、私の手元にあるだけでも二〇篇以上ある、の論文を発表してきているが、この度、『中国語言的結構与人文精神』『中国句型文化』という二冊の著書にまとめられて出版された。前者には、十五篇の論文が「文化反思篇」「結構篇」「方法篇」の三章に分けて収められており、後者は氏の博士論文である。今、この二冊の大作について、細微にわたって論評するだけの能力と時間を私には持ち合わせていないが、氏の主張するところを少しく述べて紹介に代えたいと思う。

ある言語を研究する場合、言語のもつ「普遍性」という面から、いわゆる一般言語学の理論（それは、とりもなおさずヨーロッパ言語学ということにもなろう）によって研究することも一つの方法であるが、言語の「個別性」という面から、その言語のもつ「特性」を明らかにしつつ、「言語の本質」を探るという方法もまた当然認められるべきである。そして、この場合に必要なことは、「その国の人々が、その国の言語を通して、言語を如何なるものと考えたか」（すなわちその国の人々の言語観）また、「その国の人々が、その国の言語をどのようにして研究してきたか」（つまり言語学史）或いは、「その国の人々の思惟方法」を研究の基盤に据えることである。このような方法を用いて言語を研究した人として、たとえば国語学では時枝誠記がおり、英語学では宮下真二がいる。申小龍氏の方法はまさにこの方法であるといえる。「普遍性」と「個別性」の問題は、決して、「どちらが先にあるか」というものではないが、氏は、頑固なまでに「個別性」を重視する立場にたっている。（このことに関しては中国の言語学界で最近常にとりあげられ、活発な議論が戦わされている。）

さて、氏はまず「言語はその民族の文化の基本形式の一つであり、言語研究は文化研究の有機的な一部分である」とみる。そして、中国の伝統的な言語研究は「通経致用」を旨として、いわゆる「経学」の「附庸」としての位置付けしかなされてはこなかったとはいえ、それは「（言語の）研究のための研究」といったものではなく、「文化」の研究と深く結ばれあったものであった。ところが、社会的な情勢（富国強兵に代表される近代化路線）の下に、「文化の断裂」「文化の断層」という状況が出現する。それは「晩清維新派の語文憲章」である「馬氏文通」によってもたらされたとする。その後、「白話文運動」「ラテン

化運動」さらには、『構造主義言語学』と進み、ついに「中国伝統の人文精神の淡化」すなわち西洋の「科学主義」の隆盛に陥ったととらえる。

「科学主義」とは「文化特性」などを全く無視し、「純正記述」のみの、言語を「モノ」とみなす考え方である。そして、このような「科学主義」に基づくこの八〇年の言語研究の成果は何一つないと氏は断言する。もちろんこれは極論ではあるが、「西洋言語学の模倣」だけではだめだという反省は、たとえば氏の恩師である張世祿氏にもみられるものである。『関於漢語的語法体系問題』、『復旦学報』一九八〇・九、『科学主義』に対して、氏は私信の中で「目の前の功益を追い求めるだけで、八方ふさがりの出口なしであり、単なる一種の技術にすぎず、真の科学ではない」とも述べている。

さて、こうした状況の中でいったい如何なる言語研究が必要なのか、それが氏の提唱する「文化言語学」である。すなわち、「中国人の思惟方法」に基づく言語研究『たとえば、『中国句型文化』は『左伝』を資料とした中国人の伝統的な「句型観」に基づく中国語の文型論であり、さらに、それが現代語においても一貫したものであることを論じたものがもう一冊に収められた『論漢語句子的常態』という論文である。）であり、他の人文科学、社会科学（絵画、音楽、地理、歴史、文字、方言、哲学、心理……）との協同である。（この成果として、今回の著作には収められていないが、『従漢民族的時空観看漢語施事句』という論文もある。なお、復旦大学の遊汝傑、周振鶴氏の『方言与中国文化』もこの方法による傑作として挙げられるものであろう。）

氏はこのように、実にかたくなまでに「中国（語）の人文性」を主張し、ナショナリズムに凝り固まっているようにみえるが、決して外国の理論を全て排除しようとしているわけではなく、むしろ、外国の文献に積極的に接しており（たとえば、今回収められている『試論深層結構理論的漢語化』は、チョムスキーの変形文法理論の中国語への批判的応用である。）、その量は中国国内でも屈指のものであろう。そのことは、著作中に挙げられた参考文献をみれば一目瞭然である。ただ、外国の理論、さらに言えば、権威と呼ばれるものを、鵜呑みにしないという学者としての当然で、実に勇気のいる立場を貫いているだけにすぎないのである。ちなみに、「上海青年言語学グループ」のスローガン的なものとして『吾愛吾師、吾更愛真理』という言葉がある。

氏の理論、方法は現在もそして将来においても、注目されていくことは疑いのないところであるが、理論家にありがちの「各論」（たとえば、今回収められた『動詞の分類』や『動詞、形容詞の重ね型』の論文）に「総論」が生かされないという点がないわけでもないように思える。

なお、氏の私信によれば、来年度には『人文精神還是科学主義—二〇世紀中国語言学思弁録』と『漢語人文精神論』の二冊が出版の予定であり、現在さらに『文化語言学』『文法—文化』『語言与文化』『中国語言学的現状与前景』の四冊の著作を執筆中とのことであり、「怪物ドラゴン」の今後の活躍を心から期待するものである。

付記　申小龍氏については、以前、雑誌『中国語』（大修館書店、一九八八年七月号：九月号）でも紹介したことがあり、そちらも参照して頂ければありがたい。

（うちだ・けいいち　福井大学）